

副島種臣の「君主専制」論

はじめに

明治六年十月、征韓論の対立で下野することになった副島種臣は、板垣退助、後藤象二郎、またイギリスから帰国した小室信夫、古沢滋らとともに、翌年一月、議会の開設を要求する民選議院設立建白書を左院に提出する。この建白書は、自由民権運動の出発点としての意義を持つものとされる。しかし、署名に名を連ねた副島種臣は、それ以後、板垣と袂を分かって自由民権運動に加担することはなかった。その副島は、明治十二年四月、岩倉具視の推挙により天皇の侍講に就任している。

明治三十一年、副島の回顧によれば、幕末の勤王活動以来、彼の理想とし続けた「君主専制」を実現するために建白書に同意したと述べている。他方、板垣の建白書提出の意図はイギリスの議会制度である立憲君主制を日本に導入することにあった。ということは、議会制度の内容に関して、副島と板垣の間で大きな阻隔があったということになりはしないか。副島のいう「君主専制」が文字通りのものであるな

安養寺 信俊

らば、君主の意思を拘束する議会は必要なものではない。しかし、副島が民選議院設立の建白書に名を連ねたことからして、彼の中では「君主専制」論と議会制度は両立し得たはずである。本論は、まず民選議院設立建白書作成の経緯からはじめて副島の議会制度論を検討した後、副島の「君主専制」論と議会制度との関係を明らかにすることを目的とする。なお、従来から板垣と民選議院設立建白書に関する研究は多々あるが、副島については等閑に付されている事情がある。

なお、本論は、副島側の史料としては、つぎのものに依拠した。一、『蒼海全集』（全六巻）。一九一七年、副島の子息、副島道正により発行されている（非売品）。副島の漢詩文を収集したものであり、現在のところ執筆年代の特定が困難なものである。二、『精神教育』（一八九八年）。門下生の川崎又次郎の編集による副島の講話集である。三、『副島伯経歴偶談』。「東邦協会会報 第四四号」（一八九八年）中に掲載されている副島の回顧録である。四、『副島種臣伯』（一九三六年）。執筆者である丸山幹治自ら「色々の素材原料をそのままにならべ」と述べているように、史料を編集した形態の副島の伝記

といえるものである。

一 民選議院設立建白書の作成過程

明治七年一月、副島は、板垣らとともに民選議院を設立すべきとする建白書を左院に提出する。この間の事情について副島はつぎのように回顧している。

「明治六年の末に民選議院の建白書を板垣後藤等諸君が出すことになつた此草案は大方古沢滋か書いたものであらう素とより翻訳的文章にして其眼目たる主として君主専制を咎め之に代ふに議院政治を以てせむことを望むに在り而して我に同意しろと諸君が望まれたそこで我は曰く『君主専制を咎むるやうなことでは拙者同意することは出来ない』抑も我輩志士が勤王と云ふのは他無し唯君主が専制を為す能はざること憂ひて起つたものである即ち畏くも若し我が陛下が御自身に神武天皇の御教道を遊ばされたなれば民心悦服して奔命に狂するであらう」故に此原案の君主専制を咎むる議論に拙者は同意することを得すと断はりたり。是に於て板垣等諸君が然らば此処だけをどうなりとも書直すべきが故に同意を望むと言つた然らば宜しい君主専制の字を有司専制と改正したなら宜しからう……有司専制の弊害を防制するが為に議院を作ると云ふならば我輩も亦同意しやうと云ふもので乃ち私も其連署に加はりて建白をした¹⁾。

これによれば、当初、板垣は、「君主専制」を批判するために「議

院政治」を導入することを民選議院設立建白書の目的としたことになる。その「議院政治」とは、建白書の草案を起草した古沢滋の影響もあって、イギリスの立憲君主制を模範とするものであった。かりに「議院政治」が実現したならば、憲法に従つて君主の統治が行なわれることになり、君主権力が絶対的なものとはなり得ない。とくにイギリスの場合、実質的に議會に権力があるものとされる。

これに対して、副島は、王政復古の大号令の精神である「神武天皇の御教道」の実現が幕末以来の彼の理想であり、「君主専制」を批判するような建白書には賛成できないとして一旦は署名を断っている。その後、副島は、民選議院設立建白書の目的を「有司専制」批判に変更することで板垣と合意している。ということは、副島の構想する議會が、「君主専制」と両立し得る内容を持つものであったということが考えられる。言い換えれば、副島はイギリス型の議會制度とは別の形態の議會を想定していたということになる。

ところで、副島と板垣は、「有司専制」批判に関しては意見を一にしている。そのことは、ひとつには、征韓論の分裂で明らかとなった政府内における薩長藩閥勢力に対する一方は「君主専制論」から、他方は「公議世論」からする立場の共同戦線であったことを意味する。それゆえ、「有司専制」は、副島、板垣それぞれの政治的理想に対する障害そのものであったといえる。

建白書を提出する五日前の一月十二日、副島、板垣らは、同志を集め、副島邸において愛国公党結成の署名を行っている。その「愛国公

党本誓」の一条にいう、「我輩己に愛君愛国一片の至誠の上より發憤し來りて、斯の人民の通義權利を主張保全せんと欲す。然るに之を為すの道は、即ち我天皇陛下の御誓文の旨意を奉戴し、造次顛沛、徹上徹下、唯だ斯の公論公議を以てし、常に盟約の旨意を遵守するに在るのみ」と。ここに「我天皇陛下の御誓文の旨意」とあるのは、明治元年三月十四日に發布された五箇条の御誓文を指すと思われる。つまり、愛国公党は、御誓文中の「広く會議を興し、万機公論に決すべし」を実現するものといえる。そこで、彼らは「會議」（＝議會）を開設するために、民選議院設立建白書を提出するのである。

しかし、副島は、愛国公党の方針に全く納得して加わったものではなかったという。「明治八九年の交頃板垣君等が愛国公党を起すに付て私に主領たれと云ふことをつかいを以て言ふて遣はされたそれは今東邦協會に居らるる城君等が其時使に來られたそれでも私は之を謝絶したそれから私の門下生等も私に勧め宜しく党派を作るべしと云はれたことも往々あるけれども私は毎ねに門下生を諭して「君等我輩の爲めに身に染ます国に益なきことはされぬが宜しく政府に仕へて忠義を尽すべし」と言つて之を断はりて居つた³」。なお、ここで副島が「明治八九年の交頃」というのは彼の「明治六七年」の記憶違いかと思われる。これによれば、板垣や西郷のように同郷土族をひきつれて土佐や薩摩に引きこもることは副島の本意ではなく、彼はあくまで「有司」とも「党派」的行動にみえる板垣・西郷とも異なる立場にいたということになる。つまり、副島は、「我天皇陛下の御誓文の旨意を奉

戴し」て、愛国公党本誓に署名したのであり、「党派」活動そのものを目的としたものではなかったということになる。

副島は、征韓論の対立、愛国公党本誓の署名、民選議院設立建白書の提出において板垣と行動をとみにする。しかし、副島と板垣とは同じく「有司専制」批判という点では同じ立場にたちながら、また、愛国公党、すなわち、「公議世論」という点においても同じ立場にいながら、そこには相当大きな相違があったように思われるのである。議會や「公党」を認めながら、「党派」活動には反対というような姿勢は一体どのようなものであろうか。副島と板垣には議會制度に関する意見において相当の隔たりがあったものと思われる。以下、その点を探ってみよう。

二 副島の議會制度論

副島は、民選議院設立建白書の提出後、政界復帰の勧めを断つて待講に就任している。そこには副島のそれなりに「有司専制」の理想を追求する上での自己の政治的位置設定があったものと考えられるので、建白以後の行動を列記してみる。副島は、明治八年一月、元老院議員、同十月、参議、外務省事務総裁として政府に復帰することを求められたが、それらを断り、明治九年から十一年にかけて清国に赴いている。「明治九年頃私にはそれまで足留めをしてあつて東京府滞在と云ふことで矢張前参議の月給の何分の一と云ふものを下されてあつ

た私は兎角に鬱々として楽まぬから丁度私が旧屋敷は霞ヶ関であつて其屋敷は一万七八千坪あるが其頃有栖川の宮様が買ひたいと仰しやるに依つて……私は当時其金を持つて支那漫遊と出掛けた⁵⁾。その当時は、不平士族の反乱が多発しており、西郷の西南戦争が闘われている最中の頃である。副島は、政府にも西郷にも加担することなく、この紛争から逃れる目的で清国に渡つたのである。帰国後、明治十二年四月、岩倉の勧めにより、宮内省御用掛兼一等侍講、侍講局総裁に就任する。明治十九年二月、侍講職を解かれた副島は、宮中顧問官、さらに明治二十一年四月には、憲法に関する諮詢にこたえる目的で設立された枢密院の顧問官に任命されている。つまり、副島は、みずからの政治的位置を藩閥でも反藩閥でもなく、宮中に見出していったのである。

副島の議會制度に関する意見は、「改進黨」（会長副島種臣）の「心得」にみられる。「第五条 我々が民権より希望の点は一議院にして可而我々を善と認めらるる以上は他の行政上にも我々は採用せらるるの権ある筈なり、是切に希望す言はば兩院の説あれども他の一院に於ては我々人民上これを要するの事なし又これを要するの権なし故に我々はここに干渉せず⁶⁾」。

この「改進黨」については、「種臣の門人が中心となつて奔走し、改進黨といふものが出来た。改進黨であつて、改進黨ではない、……その政治理想乃至主義は種臣の理想たる王道無偏無党、独歩中正を標榜したものであつた。此の運動は十五年三四月の頃から進められてゐ

たらしいが、五月、浅草の某寺で大会を開いて結束を固めた⁷⁾」ものとされる。これによれば、「改進黨」の理想は、「王道無偏無党、独歩中正」というものであり、したがつて、それは「党」派ではなくて王道無偏無党の「会」だといふのである。では、それは「党」派ではなく、どうして「王道無偏無党」たり得るのだろうか。

その「約書」は、さらに彼らの理想を詳述する。「夫人生まるる時より国民の名を被らぬはなし宜しく亦選挙被選挙の権を有すべきなり此義を以てせば社会党なり」我國ありてより君父あり榮貴の二字を君父に譲るぞ忠孝の本意なる斯くては王党とあるも何の不可か之有らん」道義を以て起ち道義を以て処る我が道義は天の賦するままの自由なり仁に当たりては師にさへも譲らず純然たる自由党なり」此れの数党備つて而して後に改進黨なり偏言偏行は完璧に非ざるなり且吾之を觀る王者に党なし決を多数に取る苟くも此の義を推せば天下の公道成る⁸⁾」。

すなわち、第一、国民は生来「選挙被選挙の権」を有する（社会党）、第二、国家の「榮貴」といふものは「君父」が代表する（王党）、第三、「道義」とは「天の賦するままの自由」である（自由党）が、「改進黨」にはすべて備わつており、王党にも自由党にも社会党にも偏していない、「会」であつて「党派」ではないといふのである。そこで、この「改進黨」のいう三つの内容を、以下、詳細にみてみよう。

副島は、明治十五年春、門弟達に対して、つぎのように述べてい

る。「我国資格階級といふ程のことありしは源平以来ならん、……明治の今皇に至て是等の資格を瞬息に掃蕩し玉ひしなり、今一つきたなくいふて穢多と異名せしも明詔を垂れ玉ひて除かしめたり、是は皇上の御恩ぞかし」⁹。つまり、副島は、明治天皇によって「資格階級」による制限選挙は廃止されたというのである。ただし、彼は、選挙方法に関してはいわゆる間接選挙を予定していた。「言はば郡に百村あり、一村より三人づつを選みとするが法なり、三人づつを重て百村とせば都合三百人、其の中より十人を選出するなり如何に公平の仕方にはござらぬか」¹⁰。ここで、「一村より三人」という場合、あきらかに「家」すなわち「戸主」が「一人」として想定されていると見て間違いない。戸主を単位とする間接普通選挙が一院制とセットで考えられているのである。これが副島のいう「社会党」の主張である。

つぎに、国家の「栄貴」については、明治十六年七月、副島が三条太政大臣に執奏方を依頼した「口上覚」が詳しいので解説を付しつつ検討する。

まず、副島は、民選議院設立建白書の事情について謝している。「私儀先年建言書を以て後藤象次（ママ）郎、板垣退助、由利公正等と同く上は 皇上の御栄光を不被為損、引統て下万民の康寧を捗度趣意に本き、議院設立の段願出たるは不堪¹¹恐縮」。以下、副島は、明治二十三年、国会が開設されることに当って、天皇の心構えを説くのである。このとき副島は侍講であったことからして、天皇に進言する事は自らの務めであったと自覚していたと思われる。「就て二十三

年、国会設立云々之 御勅諭被為在たる以上は、仰ぎ願くば此時を期し奉り御上之御威光益御拡張被為在、御一新度 神武天皇との 御名言に不^レ被^レ為^レ叛、猶 御誓文中 皇威を海外までかがやかすこと御実践之義不^レ堪¹²懇望」。副島は、国会を開設するという天皇の詔勅が発せられた以上、王政復古の大号令の精神である「神武復古」ということ、また五箇条の御誓文中にある「智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」という文言に叛かない国会開設を実現して欲しいということを強く願っている。さらに、「大義名分の差障を討論するの臣子の本分として」¹³といい、つぎのように述べている。「抑々我本朝に於て 天子と称するは 四海を併有するの 御名たる事律令 格式等之御法章に有^レ之、四海は 天子の御家たるべし。……私は公に対する名、一身之場合之を私となす、公の一字は 天子に帰す、私は公の為に屈する筈、私田も国家城砦等 御用向之折には差出す筈、兵役等之折には身さへ差出す筈、兵の通行には家さへ取除けらるる筈、不若茲して国をなすは難し、家の名譽は戸主をさし、国の名譽は 上一人をさす、普天率土王物たること、私開目落地之時よりして之を記す、何卒日出度き御法章を垂れさせられ度奉存候」¹⁴。副島は、「四海」は日本全国は「天子の御家」であるとしたうえで、「公」（「天子」と「私」）の「戸主」の関係を明らかにする。ここでは、「私は公の為に屈する筈」とされている。つまり、「公」と「私」が対立した場合、「公」が「私」の所有者である以上、「公」が当然「私」に優先するのである。また、「公」は国家の所有者であることから、「国の名

誉は「上一人をさす」として国家を代表することにもなる。以上のことが、「我國ありてより君父あり榮貴の二字を君父に譲るぞ」の意味である。すなわち、君主とは「御家」としての国家の「父」⇨家父長であり、「私」⇨「戸主」としての家父長の頂点にあり、しかもそれは政治的君主としての「君」でもある。まさに「君父」である。この「君父」に「榮貴の二字」を譲ってきたのは、まさに「我國ありてより」すなわち「神武」のはじめ以来である。副島によれば、これが「王党」の主張である。

なお、ここで副島が「御法章」としていることに言及したい。「口上覚」にあるように、「御法章」とは、「律令格式」ということであり、律令制度を前提に新たに設立される議會を想定しているものと思われる。「近來議事院之論。是弗得己之舉也。凡人活發生機。而甘压制之下。決罔于茲理也。且夫。榮利者一國之所共。而非人主之攸得私。苟喻于茲理。而後人君之發縱指揮。一一中于其度也。蓋衆之所志志之。衆之所為為之。夫合民志而為國¹⁵」。副島は、人間は活発なものであり決して政治的抑圧の下に生活することはできない、そこで、「議事院」が必要なのであるという。そのうえで、「榮利」は、国家全体が共有するものとする。つまり、先の「口上覚」は、直接、天皇に奏上するものであったために「上一人」としたのであるが、本来、副島は「人主」と「衆」を合せたものを「国」と考えていたと思われる。しかし、副島は、「人君発縱指揮」として「人君」が政治的な主導権を採ることを予定している。そのうえで、「人君」に対して

「衆」の意向に従った政治を行うことを忠告する。これよりみれば、副島は、議會において、天皇が「御法章」という形で政治の大綱を示すことを期待していたと考えられる。

最後に、副島の「自由党」である。副島は、「道義」を実践することが「自由」であるとする。しかもそれは、「仁に当たりては師にさへも譲らず」という主体的なものでなければならぬ。つまり、副島は、個人において、是非善悪を主体的に判断し行動することが「自由」であるというのである。問題は、この「道義」の内容であろう。その「道義」とはいかなる内容を持つのであろうか。

「今廢忠與孝而為政。匪正也。苟罔于忠與孝。雖置百議事院。非人而為之。蟲之世界也哉。螻蛄尚有君臣也。鳩尚有父子也。可弗思哉¹⁶」。副島は、「忠」、「孝」という精神を忘れて政治を行えば、いくら多くの「議事院」を設けたところで、正しいものとはなり得ないとする。つまり、副島は、政治においてより大切なことは、「忠」、「孝」という精神であり、「議事院」という制度ではないというのである。これよりみれば、副島の「道義」とは、「忠」と「孝」という儒教的範疇における倫理を意味することになる。

副島における政治の世界に道義を要請するという論法は、彼の東洋思想に淵源するものであったと考えられる。たとえば、「近來西洋分于政務。以為三局。而議事行司法之科是也。而箕子則弁之於数千歲之前。所謂猷者議也。為者行也。守者司也。而箕子欲人君之思焉。而舉行之。蓋是蒼生之心事。雖一家事之微。必有茲三事也。雖一身之

眇。亦必有茲三事也。……経国之順序。故自齊家而始也。是弗可不思矣」。ここにいう「議事行法司法之科」ということは、「近來西洋」というからにはモンテスキュー等の権力分立論のことを意味するものであろう。副島は、それは東洋においてはすでに「箕子」（中国古代の政治家）の時代から存在し得た理論であると指摘する。また、それは、「心事」、「一身」、「一家」、「経国」を貫通する原理であるともいう。このような個人の論理が国家のそれへと連続する思考は、『大学』にみえるものである。「心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后国治」（『大学』一章）。つまり、西洋では政治原則としての三権分立論が、副島においては、心のあり方から国家の原則へと連続的に理解されているのである。それゆえ、こうした「道義」を主体的に追求するのが「自由」であって、たとえ師であつてもそれを妨げる場合には「師にさへも譲らず」というのが「自由」の要点である。これが副島のいう「自由党」の主張である。「人君」が「衆」の意向に従つて政治を行えという副島の主張には、「衆」が「自由」に主体的に考え行動するならば、それは自ずから「忠」と「孝」となるということが前提とされていたのである。

「改進黨」は、以上の意味において、「社会党」、「王党」、「自由党」のすべての主張を包含しており、一党一派に偏しない「王道無偏無党」であるというのである。つまり、「王者に党なし」である。このような「王道無偏無党」論からみれば、副島は、板垣の「自由党」に対して否定的な見方をしていたのもうなずけよう。⁽¹⁸⁾

以上に見たように、ここでは、「家」Ⅱ「戸主」が間接的であれ平等に普通選挙権を与えられ、それが、「国家」の「君父」としての天皇から与えられた「御法章」を戴き、その御心を実現する議会が設置され（それゆえ、それは一院でよい）、「君父」への「忠」を主体的に「自由」に競争する政治的世界が想定されているのである。そして、それはまた、副島のいう「君主専制」に他ならない。すなわち、議会に即して整理するならば、それは次のとおりである。

第一に、議員は、「戸主」の普通選挙によつて選出されることからして、全国民を代表するものと仮託されている。第二に、議会では、天皇の「御法章」すなわち欽定憲法という形で、政治の基本的な方針が指示される。第三に、国民を代表する議員は、天皇に「忠孝」の精神を以つて奉仕すべきであるとされる。これらが、副島のいう議会の構成要素なのである。とするならば、天皇は「御法章」を示し、議員はその「御法章」の意図を汲んで具体的な法律を審議することになる。これが、副島の理想とする議会の姿であろう。こうして、天皇と国民（平等な「戸主」）とは、議会を通じてその意思を通わせることになる。言い換えれば、議会は天皇と国民との接点なのである。そのために議会は必要なのであつたと思われる。つまり、副島の「君主専制」とは、天皇が「仁」の精神にもとづき「御法章」という形で日本国家の基本的な方針を設定することであり、それを国民が共有する政治的装置が副島の「民選議院」であつたといえるのである。また、下からの「自由」で主体的な「忠孝」が、天皇に収斂していく政治的装

置が「民選議院」であつたのである。ここに、副島の「一君」と「万民」が議会制度を通じて結合し、彼の「一君万民論」がその制度的基礎を得ることになる。この装置において決定的な位置にあるのが君主にあることはいうまでもない。君主が自ら「仁」の体現者となること、それがこの政治的構造の要である。副島が天皇側近として、もっぱら活動の場を宮中に見出したことは、こうした彼の構想からして当然であつたと言えよう。

つぎに、征韓論、民選議院設立建白書の提出を通じて副島の盟友であつた板垣の議会制度論をみてみよう。これによって、板垣は自由党を結成するなど自由民権運動を主宰し、他方、副島は宮中勢力の一員として活動することになった理由がより明らかになると思われる。

板垣は、民選議院設立建白書を提出した翌明治八年一月、木戸孝允の仲介によって、大久保利通、伊藤博文らの参議と大阪で会合を持つことになる（大阪会議）。そこでは、他日国会を開く準備として元老院を設けること、司法の権限を強化するために大審院を置くこと、立憲の基礎を固めるために地方官会議を起すことなど、徐々に立憲政体の準備を行うことが決定された。なお、この会議により板垣は、一旦、参議として政府に復帰することになるが、彼は、早くも十月には野に下っている。板垣は、その理由をつぎのように語っている。

「然るに臣衷誠深く信ず、内閣を各院省使より分離するに非らざるよりは、即ち政府の事復た能く臣の之に堪ゆる所に非ず。何となれば嚮に陛下、神断して以て立憲の政体に法り、立法の官を設くと雖、然

るに先づ着手して行政を整頓するに非れば、未だ遽に其实を挙げ易からず。故に誠に政府の事を更張せんと欲す、必ず先づ内閣の分離より始めずんばある可からず」¹⁹⁾。

明治六年十月、征韓論を唱えた板垣は、内政を重視する大久保利通、岩倉具実らの反対にあつた。それなのに、明治八年現在、政府は軍艦を韓国の近海に派遣して、いたずらに挑発を行っている。板垣は、立場を逆にして、海外で事を起すよりも官紀を整えて内政を効率化することが必要であり、それは大阪会議の綱領であると主張する。しかし、三条太政大臣の入れるところとならなかった。このことから、板垣が、民選議院設立の建白を行ったときからの問題意識である「有司専制」批判を継続して内包していたことが理解できる。では、その批判精神に貫かれた板垣の議会制度論とはいかなるものであつたのか。明治十五年三月の「自由党組織の大意」に拠る。

「夫れ国を建て政を施す所以のものは、衆力の結合に依て以て各人の権利を護るに在り。故に人各々政治に頼て自由を享けんと欲せば、天然の自由を割きて人文の自由を享くるの方を求めざるを得ず」²⁰⁾。板垣は、国家の存在理由は「各人の権利」を保護することにあるという。そのためには、各人は「天然の自由」を犠牲にして「人文の自由」を享受しなければならないとする。ここにいう「天然の自由」とは、西洋近代にいう自然権のことであろうが、板垣は、その一部を犠牲にすることで「人文の自由」を獲得しなければならないとするのである。さらに、板垣は、「公衆の自由を之伸ぶるは即ち私己の自由を

全ふする所以にして、社会成立の本体なり⁽²¹⁾、と述べる。つまり、板垣は公的自由を伸張させることが、私的自由を完成する方法であり、そのことは社会形成の基本事項であるとするのである。彼はその方法として、「人民をして参政の権を得、国家公同の事に与かり、私利公益一致なきを知らしむべき⁽²²⁾」ことを唱える。つまり、板垣においては、「公衆の自由」を拡大する必要性から参政権の獲得が意図され、その結果、議会という代表機関が必要となるのである。

他方、板垣は、「公衆の自由」を確保するには、政府による国民生活への干渉を排除すべきであるという。「我党は自由の政を望む者に活へ、干渉の治を欲せざる者なり。夫の公議を行ふべきの政治を以て私行に干渉するが如きは、政教の分を紊り、公私の別を識らざるに由る也⁽²³⁾」。

板垣は、多義的な「自由」の中でも、とりわけ「公衆の自由」を重視している。彼は、その「公衆の自由」を拡大する方法として、国民に参政権を与えることと政府からの干渉を排除することを唱えるのである。つまり、板垣の要求する「自由」とは、副島の「自由」(「道義」の実践)とは異なり、参政権として具体化される政治的な文脈における「自由」であったといえる。

このような板垣の「公衆の自由」を基礎にした議会制度論は、イギリスの立憲君主制を模範としたものであった。「英国帝宝祚の万々なるは其君臣各其権限を守り、敢へて擅横压抑の事なく、君民上下自由政治の間に逍遥するに在るを知らず⁽²⁴⁾」。「眼を転じて英国の如何を視

よ。人民は自由にして人間貴重の真を顕はし、地上世人のの上に位するが如く、其帝王は地上帝王の王土に其位置を占むるが如し⁽²⁵⁾」。

板垣は、イギリスでは、「君臣」、「君民」関係において「各其権限を守」られているからこそ、「人民は自由にして人間貴重の真を顕は」すことが可能なのだと述べている。言い換えれば、権力が分立することが人民の「自由」を保障することになり、その「自由」によって人間の尊厳が発揮されるというのである。そのような国家は「常に万国の尊崇畏敬する所となり、人民は毎に外人の敬愛欽羨する所となる⁽²⁶⁾」る。このように板垣は、「自由」という概念を武器として、権力の分立を説き、「公衆の自由」の拡大こそが国家発展の基礎であると

する。なお、板垣は、「自由党組織の大意」の中で、「儒教は政治と道德とを錯雑し、修身治国を以て一途と為し、政府を以て師父自ら居り民人を教導すべき者と為せり。斯く政教の分を紊るが故に、官府施政上に於ては、其公義を行うべきの政治を以て私行に干渉し、又社会交際上に於ては私行を以て社交を害し、社交を以て私行を妨ぐるの弊を生ぜり⁽²⁷⁾」、と儒者の政治手法を批判している。この板垣の指摘は、まさしく副島に当てはまるものである。副島は、「約書」の中にみられるように、板垣においては政治社会の基礎概念となる「自由」を「道義」と一体のものとみなし、また、「議事院」では「人君之発縦指揮」が実行されるとしたのである。つまり、「自由」の概念に則していえば、副島と板垣の「自由」はその内容を異にするものであったからこ

そ、彼らの議會制度論も相違したのである。その結果、一方は、宮中に位置し、他方は、自由民権運動を主宰することになったと考えられる。すなわち、板垣にとっては、「政党」こそが議會の要なのであった。

ところで、副島、板垣双方が批判した「有司」の側の議會制度論とはいかなるものであったのか。その代表的なものとして伊藤博文に触れておきたい。明治十三年十二月の「伊藤博文の建議」に拠る。

「臣慎で欧州立憲の国を觀察するに、上下両院は車の両輪あるが如し。二つの者相制し即ち平衡を得。其帝王国に在ては元老院即上院の設け、尤も国家を保持するの要たり」⁽²⁸⁾。伊藤は、欧州の国情を觀察した結果、「上下両院」の二院制で行くべきであるという。その理由として彼は、「今天下の人物品流を概論するに、其国事を担当して文明に率先たるに堪ふるもの、士族に望まざることを得」⁽²⁹⁾ないことを挙げると。そこで、彼は、「士族を以て明かに華族の下に列し、元老議院は専ら華士族の中に公撰し、旁ら国家の勲旧と士庶の碩学を収用し、百人を以て定員とな」⁽³⁰⁾すとの議會構想を示している。つまり、現実政治の任に当る伊藤においては、国民が政治的に成熟していない以上、「国事」を託することのできるものは、旧士族しかないとみたのである。そこで、彼は、「上院」を設けて「下院」の暴走を止めることを期待したのである。すなわち、「上院」はいま一つの「有司」の結集点であったのである。

要するに、副島と板垣そして伊藤の議會制度論の根本的な相違は、

それぞれ議會が天皇と国民とをつなぐ結節点の位置に置かれながら、その議會制度運用の主体は、副島においては天皇にあり、板垣にあっては政党にあり、伊藤にあっては上院に依拠した内閣にあったのである。副島の場合は、まさに議會は天皇と国民をつなぐ結節点であり「自由」とは「道義」の実践を意味した。その結果、議員は、天皇の「御法章」の意図を「忠孝」の精神で受け止め、その具体的な施策を討議することになる。そこでの要は「君主」≡天皇にあり、それゆえ「宮中」が政治的に（それは彼にとっては「道義」的ということと同義であるが）要の位置を占めるものと考えられているのである。

三 副島の一君万民論

さて、以上において、副島の「一君」と「万民」が議會制度を通じて結合し彼の「一君万民論」がその制度的基礎を得ることになり、そこでの決定的な位置にあるのが君主にあることを見た。そして、君主≡天皇が自ら「仁」の体現者となることが要請されているのであるが、果して、それはいかにして可能なのであろうか。すでにこれまで見てきたところで明らかであろうが、副島が「君主専制」を主張する場合、それが文字通りのデスポティズムや恣意的な独裁を意味してはいないことは明らかであろう。しかし、それがデスポティズムに陥らない保証はどこにあるのか、また、もしデスポティズムではないとするならば、にもかかわらずそれが「専制」とされる所以はどこにある

のかを、最後に、彼の一君万民論の思想構造の検討をとおして見てみよう。

『蒼海全集』の中に「天地定位頌」という一編がある。その中に、君民関係を説明した文章があるので引用する。

「蓋在易象。三才為義。唯聖仁者。此科以置。夫乾者何。健而不己。夫坤者何。柔順之揆。蓋天先成。而後地成。一君二民。陽爻克明。克明克動。坤道反之。克方克止。克靜克夷。柔順利貞。君子所行。性命之德。如何不敬。君雖不君。臣禁弗臣。仲尼微予。大聖哉仁。忠孝之心。人皆有之。孝以事親。忠之攸移。君而可貶。是実無親。故求忠臣。于孝子門。漢以孝經。政治經始。謚号以孝。謂是天意。締嘗之義。自古先王。天下所悅。誕來相將。其義弘大。四海会同。胥命以孝。而以能忠。忠既出天。孝又出天。事天之孝。事親而宣。³¹⁾」。

副島は、易理に依拠する形で君臣関係を説明する。彼は、まず「天」が、その後、「地」が生成されたという自然の成り立ちによって、「君」と「民」との上下関係を規定している。「陽爻」とは奇数のことであり、それは「一」＝「君」のことを意味する。その「君」は、「克明克動」という能動的な働きをするものである。他方、「民」は、「克方克止」、「克靜克夷」、すなわち「君」に対して受動的な立場にある。このように副島は「君」と「民」の上下関係とそのあり方を規定した上で、「民」は「君」に対して「忠孝」の真心を捧げることがを説くのである。『精神教育』は、つぎのように述べている。「臣民

は、忠を重ママにも説きて孝に持ち込めば、孝の中で、一番の孝は、君に忠を尽くすことである、人臣は斯う説く、そこで、社会の安寧を保つのみならず、常に君を君として行けば、国家の発達は出来る³²⁾。つまり、副島は、自然の秩序に象って、「君」と「民」の位置関係を確定し、「民」の側の倫理が「忠孝」であるとするとする。

ところで、ここには、「忠既出天。孝又出天」とされている。これはどういう意味なのであろうか。副島においては、「忠孝」という倫理が単に人間関係を対象としたものに止まらない、それは、より根源的にいえば、「天」の倫理であるとされている。このことからして、「忠孝」の対象であった「君」に対しても「孝」の倫理が要求されることになる。「孝は道の大本にして、万善の由りて生ずる所なり。上至尊より下庶民に至る迄、一旨貫通、其義二ならず³³⁾。では、「君」の「忠孝」とは何に対するものなのか。「我が日本人民、万姓の祖、之を窮むれば、即ち天神に出づ、忠孝一致なし、親に孝なるは、君に忠なる所以なり。君に忠なるは、天神天祖を敬する所以なり³⁴⁾。つまり、「君」は、彼の祖である「天」＝「天神天祖」に「孝」を尽くさなければならぬのである。以上の副島の「忠孝」論からみれば、彼の想定する「日本」国家は、「天神天祖」、「君」、「人民」という階層秩序で構成されているということになる。また、「孝」が血縁道德であるからには、日本国家は全体として「天神」を「万姓の祖」とする血縁関係にあることになる。

このような一君万民論を前提とする副島においては、議会を開設す

ることは一つの手段でしかなかったかと思われる。「民権耶君権耶。将主宰之権耶。万有一理抑皆天。吁君権汝所自尊。吁民権汝所自言。主宰之天主宰之権³⁵⁾」。副島は、「民権」か「君権」かという議論はあるが、本来は、「天」に「主宰之権」があるという。つまり、副島は、絶対的な「主宰之権」は「天」にあり、「君権」、「民権」はその手段に過ぎないという。副島の「主宰之権」をもつ「天」とは「天御中主神」であり、それは万物の根底にある「壹氣」であり、万物はその「壹氣」によって司られているという独特の議論にもとづいていた。それゆえ、副島においては、八百万の神々ではなく、神は「天神」に一元化されていた。³⁶⁾この「天神」を祭る主体は、その直系「天祖」³⁷⁾アマテラスの直系である天皇³⁸⁾「天子」に一元化され、その「天神天祖」の徳を体现することを期待されているのである。その天皇こそが、「天子の御家」である日本の「主宰者」であり「君父」であるというのである。すなわち、君主³⁹⁾天皇は「天」の「子」であることによって、一方で、「天神天祖」に代わって「民」を「主宰」する「主宰者」となり、その意味で、「民」に超越する「専制」的存在である。しかし、他方で、それは、あくまで「天神天祖」に対する「子」の位置にあり、「天神天祖」に「忠孝」を義務づけられており、そもそも恣意的な独裁者あるいはデスポットたり得ない。副島の「一君万民論は、「天」――「君」――「民」の構造をその根底にもつていたのであった。

こうして、「君」⁴⁰⁾天皇は「天」と「民」とを媒介する存在として

位置づけられることになる。そして、「君」が「民」を主宰し同時に「民」を「君」に媒介する政治的（副島にとっては「道義的」）装置がすでにみたように議会にあつたとすれば、では、「天」と「君」とを媒介する政治的（「道義的」）媒介環は何であるのか。それこそが、侍講であり宮中顧問官に他ならない。副島が「仁に当たっては師にさへも譲らず」との「臣」としての自覚をそこに見出していたことは間違いないと思われる。では、「民」ではない「臣」は、どのように位置づけられるのか。第一に、天皇の信任を受けて現実の政治を司ることになる。「凡治国道。任須明良。庶事用康。天下用治。太平氣象。進乎未已⁴¹⁾」。第二に、天皇の過ちを正すことである。「尊者君道。卑者臣事。法象在中。大定厥義。厥義伊何。惟忠之属。惟忠伊何。奉事之福。奉事伊何。実干君顔。而以為易。人之攸難⁴²⁾」。これよりすれば、「臣」とは、政府官僚であり、宮中に関わる人々を指すことになる。「臣」すなわち天皇側近には二つの異なる役割と機構がある。「政」のレベルにおいて天皇の意を受けて天皇と議會を繋ぐ内閣と、「教」のレベルにおいて「天」と「君」を媒介し、「天」――「君」――「民」を根底においた一君万民の伝統と思想を君に体现させることを担う侍講等宮中側近の二つである。この二つが車の両輪となって天皇制を支えることこそ、「君主専制」の実現なのであった。もし、後者を無視して前者が独走するならば、それが副島にとって「有司専制」に他ならなかったのである。

おわりに

以上、主として明治七年の民選議院設立建白書に署名した副島、および、明治十四年の国会開設の詔勅からそれほど遅くない時期に展開された副島の議会制度論を検討するなかで、彼の「君主専制」論の内容を検討してきた。それが「天」―「君」―「民」を根底にした「一君万民」論と、それにもとづく「臣」意識を基礎にした、「戸主」平等の間接普通選挙制度、一院制、「御法章」＝欽定憲法構想であることを明らかにする中で、副島の独得の「有司専制」論をひとまず明らかにし得たと思われる。さらに、そうした構想が宮中側近という副島自身の政治的位置設定と符合するものであったことも明らかになったものと思われる。こうした明治十年代の構想は、その後の伊藤博文による明治憲法体制とは大きく異なる側面がある。伊藤による華族制度の創設、貴族院の設置、財産に基づく不平等選挙権、また、薩長藩閥政権の展開、そして、板垣・大隈らの政党の藩閥政府への割り込みなど。しかし、他方で、彼の「天」―「君」―「民」を根底においた家族国家論の思想は、教育勅語として結実したと言い得る側面もある。こうした政治的展開に副島がどのような意見と姿勢を見せることになるのかは、今後の課題としたい。

〔注〕

（引用にあたり、適宜旧字体は新字体に、またカタカナはひらがなに改め

たことをお断りします。）

（1）「東邦協会会報第四四号 副島伯経歴偶談」一八九八、三八・三九頁。

（2）板垣退助監修『自由党史（上）』岩波文庫一九五七、八七・八八頁。

（3）前掲、「東邦協会会報第四四号」、三九頁。

（4）柳田泉は、副島が「同志と共に愛国公党といふものを作って、その牛耳をとるといった形であり、現に愛国公党の「公党」といふ公の字を入れさせたのも種臣であるといふ」（丸山幹治『副島種臣伯』みすず書房復刻版一九七八、付録五頁）と述べる。柳田にしたがえば、副島にとつて、愛国公党は、「私党」ではなく一般に開かれた「公」的な存在であったということになる。

（5）前掲、「東邦協会会報第四四号」、三九頁。

（6）前掲、『副島種臣伯』付録七・八頁。

（7）同上、付録六・七頁。

（8）同上、付録七頁。

（9）同上、付録九頁。

（10）同上、付録九頁。

（11）同上、二八九頁。

（12）同上、二八九頁。

（13）同上、二八九頁。

（14）同上、二八九・二九〇頁。

（15）「皇帝陛下巡狩中所得詩序」『蒼海全集卷六』一九一七、一三・一四

頁。

(16) 前掲、「皇帝陛下巡狩中所得詩序」、一四頁。

(17) 同上、一四頁。

(18) 「過日も後藤象二郎などの自由党に、我が生徒を加入させたいと云ふも肥前の書生は加入させぬやうに申述べた」(津田茂麿『明治聖上と臣高行』原書房復刻版一九七〇、五四七頁)。これは、明治一四年一月二九日、同僚の元田永孚から副島が板垣と交際していることを忠告されたときの返事である。

(19) 前掲、『自由党史(上)』、一八六頁。

(20) 板垣退助監修『自由党史(中)』岩波文庫一九五八、一〇九頁。

(21) 同上、一〇九頁。

(22) 同上、一一〇頁。

(23) 同上、一一三頁。

(24) 同上、一一七頁。

(25) 同上、一一八頁。

(26) 同上、一一八頁。

(27) 同上、一〇九頁。

(28) 前掲、『自由党史(上)』、三三八頁。

(29) 同上、三三九頁。

(30) 同上、三三九頁。

(31) 「天地定位頌」『蒼海全集卷五』一九一七、六四・六五頁。

(32) 川崎又次郎編『精神教育』国光社一八九八、七〇頁。

(33) 同上、七八頁。

(34) 同上、七八頁。

(35) 「示諸生」『蒼海全集卷三』一九一七、一二頁。

(36) その詳細は、拙稿「副島種臣の国体論」(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第一三号、二〇〇二年三月)を参照されたい。

(37) 前掲、「天地定位頌」、六四頁。

(38) 同上、六三頁。